

## はじめに……宗教の四段階構造論

### 理論と体系を欠いた危うい「学」——宗教学の再構築に向けて

大変に気の重いことではあるが、日本の宗教学の現状について裏表なく論じようとするれば、オウム真理教をめぐる一連の事件との関係について触れないわけにはゆかない。1995年3月20日に発生した地下鉄サリン事件を筆頭に、数々の凄惨な事件を引き起こした同教団に対して、当時の宗教学は、確固とした学問的立場や見識を示すことができなかった。それどころか日本の宗教学は、オウム真理教の成立と発展を、陰に陽に後押しさえしてしまったのである。いわく、「狂気がなければ宗教じゃない」（中沢新一）、「仏教の伝統を正しく受け継いでいる」（鳥田裕巳）と。日本の宗教学にとってオウム問題は、自身の存在意義や存立基盤に関わる水準の事柄であり、そのことは今でも、何ら変わっていない。

紛れもない「破壊的カルト」の一つであったと言わざるを得ない同教団に対し、日本の宗教学は、なぜ判断を誤ってしまったのだろうか。時代状況にまつわる偶発的な諸要因はさておき、そのもっとも大きな理由を指摘するなら、それは宗教学において、真つ当な「学」と呼ばれ得るに足る理論や体系が根本的に欠如していたからであると思われる。実際のところ、現在の日本の宗教学では、特定の理論的パースペクティブや分析手法が研究者たちのあいだで共有されておらず、多くのケースで宗教学者は、自身が研究対象とする宗教について、独自の手法や価値判断に基づいて考察を進めている。

一言で言うなら、宗教学が有するある面で「自由」な、しかしその反面から見れば「放恣」でしかない体質が、オウムに関する判断や対応の誤りを導いたと、私には思われるのである。オウム事件以後、宗教学者たちは全般的にその言動に慎重を期すようになったが、遺憾なことに、宗教学が全体として抱えているこうした危うい構造は、現在も根本的には改善されていない。

宗教学は、19世紀後半のヨーロッパで誕生した近代的学問の一つである。中世を支配したキリスト教的伝統の重圧や桎梏から解放され、宗教学は当初、数々の理論を積極的かつ大胆に展開した。しかしながら、およそ150年に及ぶその後の宗教学の歩みは、順調なものであったとは言い難い。宗教学は、一方で、西洋優越史観や科学万能論といった近代主義的潮流、また他方で、ロマン主義やニューエイジといった反近代主義的潮流により、自らの足場を絶えず揺るがされ続けた。そして今や宗教学は、宗教に関する一般理論の構築という当初の目的を、放棄・断念したかにさえ見える。

近代の諸制度を成り立たせているもっとも枢要な原理が、いわゆる「政教分離」原則であることから明らかなように、宗教に対するスタンスの取り方は、雑多な諸要素のなかの一つというわけではなく、実は近代の基盤そのものを形成している。そうした事実から鑑みれば、近代学の一つに過ぎない宗教学が、自らの拠って立つ基盤に関わる宗教という対象を十分に反省的・客観的に把握すること自体が、そもそもきわめて困難な課題であると言わなければならない。しかし、むしろそのような困難を抱えているからこそ、宗教学には、われわれの生きている時代をより深く思考させるための根源的な力が秘められているのではないだろうか。

あらゆる先入見を排し、宗教学や宗教研究のこれまでの蓄積を改

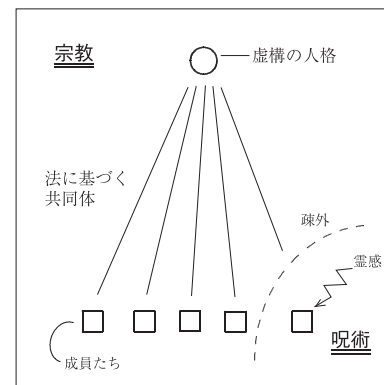
めて吟味し直すこと、そして同時に、宗教に関する一般理論の構築という、宗教学の当初の目的を取り戻すこと。私にはそれが、現在の宗教学にとって喫緊の課題であるように思われる。そこで以下では、紙幅の都合上きわめて簡略的な記述にならざるを得ないが、一人の宗教学者である私自身が、宗教史の大枠をどのように捉えているのかということについて、図式的な説明を示しておきたい。

### 宗教と呪術

宗教的現象の全体像を理解する上で、最初に指摘しなければならないのは、多くの研究者が論じてきたように、それが二つの対極的な傾向から成り立っているということである。すなわち、「宗教」の裏側には、「呪術」と呼ばれる領域が影のように付き纏<sup>まと</sup>っており、宗教的現象の総体を理解するためには、常にこの両者の関係に着目しなければならない。それではまず、表側にある「宗教」とは何だろうか。その基礎的な構造について確認しておこう。

聖書に記された天地創造や処女懐胎の伝承であれ、古事記に見られる天孫降臨の神話であれ、さまざまな宗教においては、通常 of 自然現象を超えた、ときに荒唐無稽にも思われる物語が数多く描かれている。近代初頭の啓蒙思想においては、これらは概して前時代的「迷信」と捉えられ、科学的な知識が十分に普及すれば、やがては<sup>また</sup>廃れてゆくだろうと考えられた。しかし、すでに科学が高度に発達した現在に至ってもなお、われわれはこれらの宗教的物語から完全に自由になっているわけではない。果たしてそれはなぜだろうか。

一言で言えばその理由は、人間が常に、さまざまな様式の「共同体」を形成することによって生を営む存在であるから、と考えることができる。家族、教会、会社、国家など、その規模や様式は時と



場所に依じてさまざまだが、人間が生存してゆくためには、何らかの形の共同体を欠かすことができない。そしてそれらの共同体は常に、祖霊、神、法人、王統など、現実には存在しない「虚構の人格」を中心に据えることによって成り立っている（簡潔に図式化すれば、共同体は常に、左のような

ツリー状の形式によって構成される）。

そして言うまでもなく、それらの多くの共同体は、一つの世代で完結するものではなく、幾世代もの長期間にわたって存在し続ける。ゆえにそこでは、特定の生身の人間がある一定の期間において代表や指導者の地位に就くとしても、それとは別の水準で、共同体が世代を越えて存在し続けること、また、たとえその成員がすべて入れ替わったとしても、共同体そのものは同一であり続けるということを保証する象徴的存在、すなわち「虚構の人格」が、必然的に要請されるのである。

「虚構の人格」は、共同体の成員たちに対して、どのように生きるべきかという規範や道徳を、より厳密に言えば、「法」を告知する。共同体は、そうした法を紐帯として結成されるのである。

「虚構の人格」を中心に掲げ、そこから発せられる「法」を紐帯として、「共同体」を結成すること。われわれは宗教の基本構造を、以上のようなものと理解することができるだろう。「虚構の人格」も「法」も「共同体」も、現実には自然的根拠を持たない、本質的

にフィクショナルな存在に過ぎない。しかし人間たちは、それらが実在すると信じることによって、社会的諸制度を維持し、世代から世代へと生を紡いできたのである。宗教が現在も消滅しないのは、こうした社会構築の様式を、人々がなお必要としているからであると考えることができる。

しかし同時にわれわれは、次のことにも目を向けなければならない。それは、特定の宗教的信仰によって形成される共同体のシステムは、決して完璧には作動することがない、ということである。そこには常に何らかの要因で縦びが<sup>ほころ</sup>発生し、それにより、共同体にうまく馴染むことができない人間、疎外される人間が生み出されることになる。そしてそうした疎外感は、多様な症候を伴う心身の不調として表面化する。その際に、被疎外者はしばしば、特殊な意識状態（「変性意識」や「トランス」、あるいは「解離」と称される）のなかで、霊的諸存在と直接的に交流するようになるのである。

被疎外者が交流する霊的諸存在は、共同体で崇拝される「虚構の人格」と表面的には似通っているように見えるものの、実際にはまったく別種の次元に位置している。「虚構の人格」が、個々人に対してあくまで超越的な存在である一方、それらの霊的存在は、特定の個人の心身奥深くにまで侵入する。また、前者が公的性質を帯びるのに対して、後者は私秘的な存在に留まる。そして人々は、そのような諸霊に対して、表立っては口にする<sup>はばか</sup>ことを憚られる種類の願望や呪詛を託すのである。

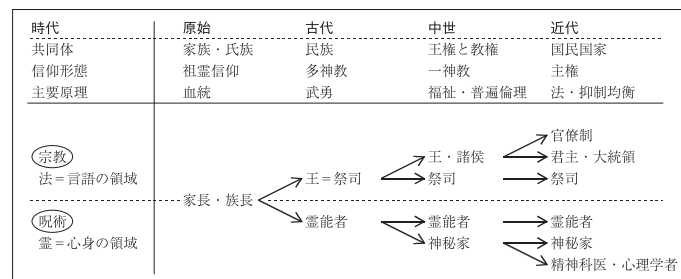
個人が霊に憑依されるという現象においては、まず最初に、悲哀・孤独・怨恨・罪責感・心的外傷といった否定的感情の横溢が見られるが、人は諸霊との交流を深めることにより、次第にそうした感情をコントロールすることができるようになる。そしてそのプロ

セスを通して、やがては心身の不調から解放されることにもなるのである。その意味でこれらの現象は、原始的な医療行為としての役割をも担っている。われわれはこうした領域全般を、「呪術」と総称することにしよう。

**宗教の四段階構造論**

以上のように、まず「宗教」とは、虚構の人格を中心に掲げ、言語によって公示される法を紐帯とし、共同体を結成することを意味する。それに対して「呪術」とは、個人が心身において感得する靈的諸存在が蠢く領域を指す。宗教的領域の裏側には、常にこうした呪術的領域が隠されているのである。

それでは、対極的な傾向を有するこの両者は、歴史的にどのような相互関係を形作ってきたのだろうか。私自身は、人類史の全体をマクロな視点から捉えた場合、「虚構の人格」を中心とする宗教的体制は、原始・古代・中世・近代という四つの段階を経ながら変化・発展してきた、またそれに応じて、宗教と呪術の各領域が機能分化してきた、と考えている（その全体像は、下図によって示される）。以下では、各段階の概要を簡潔に説明することにしよう。



1) 原始の祖霊信仰

宗教が歴史上、最初にどのような仕方で出現したかということについて、宗教学では未だに定説が確立されていないが、多くの研究者が同意するであろう点は、それが「死」に関する思索から生まれた、ということである。原始の人々は、さまざまな生物が死によって生命を失った後もなお、存続してゆく何かがあると考えた。その存在は一般に、「霊」や「魂」と称される。古今東西の多様な文化のなかで、これらに該当する概念や言葉を持たなかったものは存在しなかった、と言っても過言ではないだろう。

霊や魂を世界のなかでどのように位置づけるかということは、文化によってまさに千差万別である。初期の宗教学において「自然崇拜」(マックス・ミュラー) や「アニミズム」(E・B・タイラー) 等の用語で名指されたように、原始的信仰には、人間や動物のみならず、鉱物や植物や天体等を含め、世界のすべてが霊魂で満たされていると考えるケースが多く見受けられる。しかし、多種多様な霊魂のなかでも特に重視されているのは、明らかに「祖霊(祖先の霊)」という存在である。

人類の原始的な共同体は、狩猟採集を主な生活手段とし、血縁や地縁を基礎とする小規模なものであった。そのなかで人々は、家族や氏族の血統を重視し、共同体の先人を「祖霊」として崇拝する信仰を保持していたと想定される。

この段階の信仰形態においては、宗教と呪術の機能分化は、明確な形では未だ発生していない。共同体は、何らかの仕方で表象される「祖霊」(「祖神」「氏神」「トーテム」等を含む) を中心として形成され、現行の共同体の成員と祖霊との交流<sup>コミュニケーション</sup>を実現するため、供犠や聖火崇拜といった各種の儀礼が執行された。そして、諸儀礼にお

いて祖霊が召喚される際には、さまざまな呪術的・シャーマニズムの技法が、主要な役割を果たしたのである。原始共同体の長は、自らが祖霊の継承者であることを儀礼的に演出することによって、宗教や政治の主宰者としての地位を確立した。そして彼は、多くのケースでは同時に、医療者や占い師といった呪術的役割をも兼ね備えていたのである。

## 2) 古代の多神教（民族宗教）

生活の糧を得る主な手段が、狩猟採集から農耕へと移行することによって、人口は徐々に増加し、共同体の規模も拡大していった。また、農耕のための定住生活が一般化するにつれて、氏族や部族のあいだでは、土地支配をめぐる戦争がしばしば行われるようになった。そして、戦争に勝利した一族は、自らを「貴族」と位置づけ、敗れた一族を「奴隷」的な地位に落としたのである。

また、貴族のなかでも特に有力な者、強大な武力を備えた者は、「王」という称号を名乗った。こうして、王を頂点とする国家組織、並びに、王・貴族・平民・奴隷といった諸階級から成る古代的身分制度が形成されていった。そこでは依然として、血縁や地縁が重要な意味を持っていたが、次第にそれらを超え、言語や文化、自然環境の共通性を基盤とする「民族」的なアイデンティティが育まれていったのである。

このような仕方で形成された民族的共同体は、しかし実際には、その内部に多くの氏族や部族、職業集団、階級等を内包した多元的集合体であった。共同体の内部では、それらの部分的集団の存在を象徴するために、多種多様な神々が祀られた。また、神々の相互関係を叙述する神話や神統記が盛んに作成され、そうした物語におい

て王族は概して、神々のヒエラルキーの頂点に君臨する神と密接に結びついた存在として描かれることになった。

民族宗教はもっぱら、土地支配の正当性を証立するための役割を果たした。その信仰において主に祈念されたのは、食物の豊かな実りと、戦争での勝利である。政治支配者（王）と祭祀主宰者（祭司）は、ときに別々の人間によって担われたものの、その両者が完全に分離するということにはなかった。王はしばしば、神の化身やその末裔と見なされ、また祭司は、王権の神聖性を演出するための諸儀礼を遂行したのである。

このように古代社会においては、未だ素朴で小規模な形態ではあれ、国家と呼び得る水準の共同体が形成され、同時に、それを基礎づけるための神話や儀礼が整えられた。しかしながらここでは、あらゆる宗教的信仰が、国家秩序の内部に吸収されたわけではない。そうした包摂を逃れた、あるいはそこから排除されたさまざまな信仰が、国家の外部や周縁部に存在し続けたのである。それらは一般に「民間信仰」と称される。

これらの信仰については、正確な歴史的記録が乏しく、内容も雑多であるため、全体像を把握するのが著しく困難だが、その代表例は、「シャーマン」や「巫者」といった霊能者の働きに見ることができる。彼らは、明確な組織を作り上げることなく、もっぱら個人で活動し、死者の供養、祟りや災厄の祓い、祈祷、占いなど、庶民から持ち掛けられるさまざまなニーズに応じたのである。われわれはこの段階に、宗教的領域と呪術的領域の最初の分化を認めることができるだろう。

### 3) 中世の一神教（世界宗教）

古代に成立した民族的共同体や国家は、相互に抗争を繰り返し、そのなかのいくつかは、「帝国」と称される規模にまで成長していった。それに伴い、広域的支配を可能とするような法体系や官僚制度も、萌芽的な形成を見せた。しかし他方、そうした強大な国家によって支配・抑圧される人々が増加するにつれ、民族宗教的な信仰形態に対する根本的な疑義も提示されるようになった。すなわち、民族的排他性、戦争による勝利の賛美、階級的身分制度の正当化といった事柄が、本当に倫理的に正しいものと見なし得るのかという異議申し立てが行われ始めたのである。そのような動きのなかから、民族の枠組みを超えた新たな宗教形態である「世界宗教」が誕生することになる。

世界宗教の代表例は、周知のように、仏教、キリスト教、イスラム教の三者である。仏教の開祖であるゴータマ・シッダールタは、釈迦族の王族の一人として生を受けたものの、この世のすべては苦に満ちていると考えるようになり（一切皆苦）、王位継承者としての身分を捨てて出家し、苦からの解放（解脱）を実現するための道を説いた。また「キリスト（メシア）」とは、元来は「油注がれた者」を意味し、ユダヤ教において具体的には、神ヤハウエの承認と祝福を受けたユダヤ民族の強力な王を指し示す言葉であった。ところがキリスト教においてそれは、自らの死によって全人類の罪を贖う世界的救済者へと、その姿を変容させている。さらにイスラム教では、部族の血統や掟に支配された旧来のアラブ社会の状況が「ジャーヒリーヤ（無明時代）」と捉えられ、偶像崇拜的な多神教を放棄し、唯一神アッラーに帰依すべきことが説かれた。

全体としてこれらの世界宗教では、民族的優越性や排他性を伴う

信仰形態が退けられ、唯一普遍の神的存在に対する崇拜と、その下での万人の平等、および、将来の救済と破滅を分かち善悪の基準の明示などに力点が置かれていることが見て取れる。

古代的な民族宗教において、民族の繁栄をもたらす重要な手段として武勇が賛美されたのに対して、世界宗教においては、武力の専横な行使が批判の対象とされ、それに代わって、弱者や貧者を苦難から解放することが重視された。仏教、キリスト教、イスラム教はそれぞれ、サンガ、教会、ウンマという共同体を作り上げたが、それらにおいては、様式や程度の違いはあれ、弱者救済や相互扶助を目的とした諸制度が整えられたのである。それらの組織は、中世の社会を支える重要な構成要素の一つとなった（またそれが、現代的な福祉観の源流を形成していることも見逃すことはできない）。中世においてもなお、民族的紐帯に依拠した世俗権力（王権）は根強く存在し続けたが、世界宗教の共同体（教権）は、別種の理念に基づく組織としてそれに並び立ったのである。中世社会の一般的特色は、王権と教権が並存し、両者の複雑な相互関係に立脚した統治が行われた点に見出すことができる。

世界宗教の諸思想では、現実世界を超越した形而上的世界についての考察や、普遍倫理の探求が行われ、それに伴い、高度な神学や教学、宗教法の体系が発達した。しかしその一方、言葉や文字によっては神の究極的リアリティを把握することはできないと主張する流派も現れた。いわゆる、「神秘主義」や「密教」と称される潮流である。それらにおいては、内面世界への沈潜や厳しい修行の実践によって日常的自我を超脱し、神との一体化を実現することが目指された。また、神秘主義や密教の運動は、日本の「修験道」に典型例の一つを見ることができるよう、しばしば各種のシャーマニズ

ムや民間信仰とも混淆していったのである。

しかしながら、神や霊との直接的な触れ合いを求めるこれらの「呪術」的潮流が、世界宗教の主流派から常に歓迎・容認されたというわけではない。むしろそこには、個々の神秘体験が過度に重要視される一方、聖典や聖職者の権威が軽んじられるなど、共同体の秩序を根底から揺るがす危険性が孕まれていたため、それらはときに「邪教」や「異端」として厳しく排斥された。また、霊との接触によって引き起こされる心身の症状が常軌を逸した水準にまで達した場合、それは「悪霊」や「悪魔」が憑依した証拠と見なされ、悪霊祓い（エクソシズム）の対象ともなったのである。

#### 4) 近代の国家主権

先に述べたように、中世においては、王や諸侯といった世俗権力に並んで、世界宗教に基づく共同体が形成されることにより、王権と教権の「二重権力」の構造が現出した。このような体制は世界の各所で見られたが、そのもっとも典型的なケースと考えられるのは、ヨーロッパのキリスト教社会の状況である。他の世界宗教と比較しても、キリスト教においては当初から、政治的権力と宗教的権威を区別するための構図が一層根底的なレベルで内包されていた（「神の国」と「地の国」の峻別や、聖典と法体系の分離等）。そして、ヨーロッパにおいて展開された世俗権力とキリスト教権力の相克を切っ掛けに、近代的な政教体制が生み出されることになったため、以下では特に、その経緯について略述することにしよう。

西ローマ帝国が5世紀に滅亡した後、ゲルマン諸族が建設した新たな国家とカトリック教会は、相互に手を携えながら成長した。前者がカトリックを唯一の真正な宗教と認める一方、後者は王に「塗

油」を施すことにより、その支配の正当性を証立てたのである。

しかし、両者の協調関係は長くは続かなかった。11世紀に入ると、王権と教権は特に、聖職者の叙任権をめぐる鋭く対立するようになる（叙任権闘争）。さらに16世紀には、教会による世俗権力への介入に関して、キリスト教の内部から反対運動が勃興し、「宗教改革」へと発展していった。ヨーロッパ社会は今や、カトリックとプロテスタントという信仰上の差異によって、対立と抗争を繰り返すようになったのである。

こうした状況を受けて発案されたのが、いわゆる「社会契約論」である。その代表的理論家であるホッブズとルソーはともに、王権と教権による「二重権力」の構造こそが、社会を不安定化させる根本的要因であると捉え、それに代えて、人民の契約によって創設される国家に「主権」の地位を付与するべきであると唱えた。ホッブズの『リヴァイアサン』によれば主権国家とは、「平和と防衛とを人間に保障する地上の神」なのである。われわれはここに、近代社会の統治の任を担う新たな「虚構の人格」と、それを基礎づけるための理論＝神話が作り上げられるのを見ることができるだろう。

古代や中世の国家が、各種の神的存在によって根拠づけられていたのに対して、近代の国家は、原則として人間によって根拠づけられる。すなわち近代国家は、自由な主体としての平等な権利（基本的人権）を有する諸個人の合意によって形成されるのである。こうした理論に基づき、古代的民族宗教の観念に由来する貴族・平民・奴隷の区別や、中世的世界宗教の観念に由来する聖職者と俗人の区別は、次第に廃棄されていった。また近代においては、人間の理性的能力が最大限尊重されると同時に、それが一定の限界の枠内にあること、常に可謬的かつ可変的なものに過ぎないことが意識された。

ゆえに、従来の普遍的・固定的な倫理観や善悪二元論に代えて、人間の判断を批判的に検証し続けるための体制、すなわち、三権分立に見られるような「抑制均衡」(チェック・アンド・バランス)のシステムが、さまざまな領域で整備されていったのである。

国家は基本的に、議会で決定される「法」に則って運営される。近代以前において法は、神的起源や伝統の観念に基づく神聖性と永遠性のオーラを帯びていたが、近代の法は、あくまで諸個人の合意によって形成される可変的なものであり、個人や団体間の権利を調整するための手段の一つと捉えられる。また法は、改めて言うまでもなく、遙か原始社会にその淵源を有し、歴史の過程において、不文の慣習法から明確な法理を備えた実定法へと徐々に精緻化されていったのだが、それは近代の「法治主義」において、ついに社会を隅々にまで支配するに至る。それとともに、法に基づいて行政を遂行するための人的機構として、官僚制が高度に発達する。

このように、近代の国家と社会は、精緻かつ柔軟な法体系と官僚制を基軸として運営されるが、他の宗教的要素が、その体制から完全に姿を消したというわけではない。日本の天皇制に顕著のように、前近代的な王権はしばしば、国家の統合性を具体的に表象するものとして、立憲君主制という枠組みにおいて残存し続ける(それ以外の多くの共和制国家では、大統領がその位置を占める)。また、世界宗教を始めとする旧来の諸宗教は、政教分離の原則によって政治的領域から切り離されながらも、「信教の自由」に基づく自発的な活動を保障され、国家の手の及ばない領域に対する福祉の提供や、国家の枠組みとは異なる世界的あるいは地域的コミュニティの形成に寄与することになったのである。

近代における「呪術」的領域の概要についても瞥見しておこう。

霊能や神秘主義といった潮流は、依然として社会の周縁部に留まりながらも、根強く存在し続ける。伝統的な諸宗教が勢力を弱めた結果として、「スピリチュアリズム」を始め、新たな死生観を提唱する諸運動の勃興が見られた。また、19世紀に登場したロマン主義においては、宗教はもっぱら「心のなかの現象」と捉えられ、その観点から、古今東西の神秘主義が肯定的に再評価されるようになった。古来の呪術的伝統と現代科学を放恣に混淆させるオカルティズムやニューエイジの潮流は、ときに大衆的なブームを生じさせる。こうした現象においては、特定の霊能者や神秘家がカリスマ的地位を獲得し、その人物を中心として、新宗教や「カルト」の活動が繰り広げられることもある。さらには、ナチズムにその典型例が認められるように、靈感に鼓舞された革命指導者が登場し、国家そのものを全体主義的に統治するに至るケースさえ存在する。

さまざまな霊現象や神秘体験に関し、近代に現出した顕著な特色は、精神医学的・心理学的なアプローチが取られるようになったことである。官僚的な医療システムが発達し、精神医学や脳科学の知見が蓄積された結果、異常な精神症状は、現在では科学的分析の対象の一つとなっている。今や霊能者や神秘家は、ときに一人の「患者」として扱われるのである。しかしそこには、こうした現象に付随する社会的問題性が看過され、病院内の密室にすべてが覆い隠されてしまうという危険が孕まれてもいるだろう。霊的現象を核とする諸信仰は、歴史の過程のなかで徐々に周縁化されていったが、近代においてその傾向は、一つの極点にまで達したのである。

あくまで、現時点において私個人が思い描いている図式を示したものに過ぎないが、一般に「宗教」と呼ばれる現象は、簡単に素描



ただけでも、上述のような歴史的諸段階と、それに伴う多様性を備えている（念のために注記すれば、ある段階の宗教は、それ以前の段階の諸要素を何らかの形で引きずり続けるため、実際には相当に複雑な構造となる）。個々の宗教現象について客観的な分析を試みようとする場合には、まずはこうした図式に照らしながら、その現象が歴史全体において占める位置を把握しておくことが、必要不可欠の第一歩となるだろう。

本書では、宗教についてさまざまな方法・側面からアプローチした30冊の書物が紹介されるが、それらは、宗教理解において重要かつ鋭利な視点を提供している書物、あるいは、今日的な観点からすれば何らかの問題を抱えてはいるものの、宗教に関する諸事象を考察する上で避けて通れない次元を示している書物である。私自身、一人の読者としてこれらの書物に出会うことによって、宗教についての理解を深めてきた。私がここで示したような宗教史の図式に賛同するのであれ、それとは別の見解に到達するのであれ、読者が本書で紹介した書物に触れることを切っ掛けに、宗教学の再構築に向けた議論に加わっていただけるようになれば、著者としてこれに勝る喜びはない。

（文中の記述では、便宜上すべての敬称を略した。ご了承いただきたい。）